

観光ボランティアガイド

海外からの観光客ともコンタクトをとりたいが、言葉の壁があり思うようにいかない。登別厚生年金病院の看護師さんは、「東南アジアの人なら大抵英語が通じます」というが、当方は学生時代の怠けが災いして『英語』と聞いただけでジンマシンが出そうになる。だから薬師如来堂の前でスプーンを手にした香港の学生に「D o u s e E n g l i s h ? 」と聞かれた時は大いにあわてた。

湯に含まれている成分を「B O R I C A S I D」とマジックで画用紙に書いたら、それをのぞいたアメリカ人の子どもが「違う！」と叫び、ホウ酸は「B O R I C A C I D」と訂正するようにとボ

ールペンを貸してくれた。おかげで国際的な恥じさらしをせずに済んだ。また、香港から来た若い男女から、賽銭箱を指差し、英語で

「この湯を飲むとお金を取られるのか（韓国人の留学生在が日本語に訳してくれた）」と聞かれたが、瞬時に適当な言葉が出てこない。苦し紛れに「ノー デイス イズ ア プライベート ブッダ」なんて答えたら、ホッとした顔で湯を汲んでいた※。中学生に笑われそうな話し方だが、何とか通じて良かった。

だが、老舗ホテルの支配人さんが「言葉は通じれば良いというものではありません。不快感を与えないように気配りが必要です」と話してくれたことがある。

ジーンズ姿や地図を手にした欧

米の青年に、大湯沼展望台に行く道を教え、「A p p r e c i a t e」とか「T a n k y o u」と

いわれて少々いい気持ちになっていったが、初歩的な単語を並べただけの話し方では「急な坂道を登れ」「10分間で歩け」と命令したように受け取られたかもしれない。地獄谷に粗野なガイドがいる、との印象を与えたのではないかと思ひ、深く反省している。

2005年は、『好ましい話し方』を高校生からでも学ばなければ、という気持ちはあるが・・・難しいかな。

※衛生上の問題から2004年の途中からこの湯を飲むことが禁じられている。

（美園町／西巻弘光さん・登別観光ボランティアガイド）

地獄祭りでの熊舞を終えて

登別東町
ほりもと たか なお
堀本孝尚さん
(登別中学校3年)



2004年、登別中学校は、登別温泉中学校と統合しました。

最初は「こんな3年生の時期に統合しても、仲良くなれるのかなあ」と思いました。そんな中、登別温泉の最大行事の地獄祭りに、登別中学校全校で参加することになりました。1・2年生は鬼みこし、そして僕たち3年生は、登別温泉の郷土芸能である熊舞に挑戦することになりました。

元登別温泉中学校の生徒は、経験していましたが、僕たち登別中学校の生徒は、何もかもが初めてでした。練習は元登別温泉中学校の生徒が中心になって進められました。疑問を持ったときには、すぐに質問し、多少ぶつかりあったこともありましたが、それがきっかけとなり、だんだん僕たちのコミュニケーションがとれていきました。

僕の担当は、一番重要で、一番大変な『熊』のパートでした。熊は、2人で一頭という形のため、パートナーとのコミュニケーションが大切です。僕たちは、なかなか大技が上手いかず、出番を祭りの2日目にしてもらいました。しかし、本番1日目、おもわぬハプニングが起こりました。この日出るはずの組の1人がケガをしたため、急ぎ僕が出てくることになりました。パートナーも代わり「どうしよう」と思ったがやるしかありません。

そして本番、大技も決まり、熊舞は大成功でした。この日のパートナーは、元登別温泉中学校の片岡君でした。今回の熊舞を通じて温泉の人たちと、いろいろな面で交流が深まったと思います。来年、そして次の年も、熊舞を続け、登別温泉の皆さんと協力し、登別を活気づけていってほしいです。

8

月



▲エンマ大王からくり山車



▲足湯体験

第41回登別地獄まつり（8月28日・29日）

2004年を振り返って⑧